異文化と心通わせ ⑰

村田　佳子

人の魅力と動物園？

先日、国際協力機構（JICA）筑波国際センターで共に仕事をした仲間との集まりがありました。ケニアやタイの事務所から赴任を終えて帰国した人、これからベトナム、中国へ赴く人、来週インドへ出張する人などなど、現在取り組んでいるプロジェクトもさまざまな面々です。お世話になった所長、最初に仕事をしていくうえでの基本的なことを教えてもらった課長、席を並べた同僚に再会し、私はとても温かい気持ちになりました。

みんなと別れ、1人地下鉄を乗り換え家路に向かう間もその気持ちは続いていました。彼らと一緒にいると温かい気持ちになるのはなんでだろう？　あの人たちが魅力的な理由って、そしてそこに流れる文化とはなんだろう？

その中の1人が国家公務員からJICAに転職した4年前のことを振り返ってこう言いました。

「動物園みたいだと思った」。おもしろい表現です。確かにゴリラみたいな人も、お猿さんみたいな人もいる…（いえいえ、そうじゃなくて…）。動物園の魅力ってなんだろう？　ちょっと考えてみました。

動物園はそれぞれの動物にほかと違う特徴があって、全部違うところがおもしろいです。よくこんなにいろんな動物集めたなぁと感心します。そうして仲間を思い出してみると、ニコニコ話を聞く人、よーくしゃべる人、バッサリ斬る（厳しいことをストレートに言う？）人、ストイックな人などなど。みんな仕事の仕方も違い、専門分野も違います。そして共通点は、違う意見や価値観の人に耳を傾けることができるということです。

仕事で何か話し合わなくてはいけないとき、「どうして分かってもらえないの！」と腹が立ったり、「どうして同じように考えてくれないの…」と一瞬落ち込んでしまうことがあります。でも果たして目の前にいる人と価値観は似ているのでしょうか。勝手に自分と同じように考えてくれると思い込んでいただけということが私の場合はよくあります。

JICAのように仕事相手が途上国の、言語も価値観も宗教からライフスタイルにいたるまで圧倒的に何もかも違う人と仕事をしていると、自分のやり方を変えざるを得ないと気づいたり、相手にとって分かりやすい表現を模索したりすることがよくありました。

そんな中、圧倒的に何もかも違う相手に自分との共通点がみえたときにその人をちょっと愛おしくなる瞬間があります。すごくささいなことですが、さっきまで「この人本当にトンチンカンなこといって全く！」と思っていた相手が、例えばかばんから外国語で書かれた日本のグリコポッキーを出して、「これ、私のお気に入りのお菓子。食べる？」なんてケロッとして言われると「私もこれ好き。あなたの国でも売っているんだね！」。そんなことでも、「この人とはきっと分かり合えるはず」と信じたくなるものです。

身近な人にもちょっと視点を変えてみて、違いを認めたり、いい意味で違いをおもしろがったりしてその人の可能性を信じるような余裕を持ちたいなあと思います。幸運にもそういう環境にいて育ててもらったから気づかなかったのですが、JICAの仲間が魅力的だったのは、「人は違うからおもしろい」という文化がそこに流れているからなのかなと実感しました。

（鹿岡市出身、コーチングシステムズ）